

小学校における食育の実践

「お野菜探検隊になろう」プログラムを児童は家族に話したか

まるやまともこ そとやまともみ よしおかゆきこ
 ○丸山知子¹ 外山智美¹ 吉岡有紀子²

(1: 相模女子大学大学院栄養科学研究科 2: 相模女子大学・大学院)

【背景】食事中に自分から話すことが多い子どもは健康状態や食生活が良好であること、又、子どもが学校で得たことを家族や友人に伝えるという自発的な行動が、家族の食行動までも改善した、との報告もある。すなわち、児童が食育で得たことを家族に伝えることで、児童のみならずその家族の食生活を良好にすることが期待される。そこで本研究では、食育プログラムにより家族間のコミュニケーションとしての会話の量が高まるか、又、家族に話した内容は何かについてを普段の家族間のコミュニケーションの状況をふまえた上で明らかにすることを目的とする。

【方法】1. 学習者 K県小学校第4学年67名 (男子:21名、女子:46名) 2. 調査方法 6月上旬に事前調査を行い、1学期は7月(40分)、2学期は11月(110分)に食育プログラムを実施

した。食育プログラムの内容は表1に示す。食育プログラム実施1週間後に事後調査を行った。有効回答数は51名。

【結果】児童が学校でのことを普段家族に話すかについて「よく話す」が25人(49.0%)、「ときどき話す」が22人(43.1%)、「あまり話さない」が4人(7.8%)だった。「よく話す」児童のうち、1学期と2学期どちらも話した児童は15人(60.0%)、一方「あまり話さない」児童では2学期について話した児童が4人(100.0%)であり(表2)、ほとんどの児童が自分から本研究の食育プログラムについて家族に話していた。家族に話した内容としては、授業の中身について話していた児童が多かった。

【考察】普段学校のことをあまり話さない児童も食育プログラムBについては全員が家族に話していたことから、本研究の食育プログラムを継続

して実施することが児童の自発的なコミュニケーションを高める可能性があると考えられる。

【ラウンドテーブルでの検討課題】

- (1) 会話を食育プログラムの評価指標として用いることについて
- (2) 家族間のコミュニケーションを高めるような授業内容について

(連絡先) 丸山知子

〒252-0383 神奈川県相模原市南区文京

2-1-1 相模女子大学

栄養教育学研究室

E-mail:s1271105@

st.sagami-wu.ac.jp

表1 プログラムの内容

食育プログラム	テーマ	実施日	学習目標
A	「お野菜探検隊になろう～これであなたも野菜博士～」	平成23年7月1日(金)	1. 野菜の特徴を発見できる 2. 野菜の旬やその旬ごとの役割を知り、春夏秋冬に振り分けることができる 3. 食事ででてくる様々な野菜(苦手な野菜や食べ慣れない野菜)に興味を持ち、食べよう、食べたいという気持ちが高まる
B	「お野菜探検隊になろう2～自分にぴったりなお弁当を見つけに出發だ!～」	平成23年11月2日(水)	1. 1学期に学習した旬の野菜と秋が旬の野菜を思い出す 2. 楽しみながら自分にぴったりなお弁当をつくる5つの方法を見つけることができる 3. 自分にぴったりの食事がわかり、自分にぴったりの食事をつくりたくなる 4. 3・1・2弁当の設計図をつくる喜びを知る 5. 自分にぴったりの食事を自分でつくれる自信がもてる 6. これから3・1・2弁当箱法を活用して自分にぴったりの食事で食事をしたいという気持ちが高まる

表2 普段のコミュニケーション群別 食育プログラムによる家族間のコミュニケーションの状況

コミュニケーション状況	普段のコミュニケーション群			全体 n=51
	よく話す n=25	ときどき話す n=22	あまり話さない n=4	
食育プログラムA・Bどちらも話した	15(60.0)	9(40.9)	0	24(47.1)
食育プログラムAについて話した	2(8.0)	2(9.1)	0	4(7.8)
食育プログラムBについて話した	6(24.0)	9(40.9)	4(100.0)	19(37.3)
どちらも話さなかった	2(8.0)	2(9.1)	0	4(7.8)

人数(%)